短期大学生に於ける進学動機と職業志向性に関する一研究

松田　浩平・加藤　大鶴・永盛　善博

短期大学の役割は2000年前後からの相次ぐ大学等の改組転換により大きく変化した。これまで短期大学が受け持っていた専門職養成も大学へと移行してきた。短期大学への進学動機と学科イメージに関して西野・小関ら（1986）は資格取得教育を志向する学生の満足度の高さを指摘した。本研究では，最近の動向を知るために，短期大学生の進学動機と職業志向性を学科間で比較した。その結果，進学動機では生活志向，自己実現，専門志向，成長志向，青春享楽の５因子が抽出され，職業志向性では，労働条件，自己実現，社会的承認，関係性の４因子が抽出された。このうち経営系学科と総合文化系学科では専門志向が低く対人的な価値形成を将来の職業に求めない傾向を認めた。また保育系学科と介護福祉系学科では専門性志向が高く対人的な価値形成を職業に求めることが明らかとなった。

１．序論

これまで短期大学は，古くは主に女子の教養教育としての位置づけをへて，近年では専門的な資格の取得による職業教育を行う高等教育機関として時代の変遷の中で短期高等教育機関としての役割を果たしてきた。しかし，短期大学の役割は，2001年の文部科学省による大学の設置等の認可に係る審査関係規程の改正[1)]を受け，2000年前後からの相次ぐ短期大学からの大学への改組転換により大きく変化した。従来は短期大学や専門学校が主な専門職養成教育課程として受け持ってきた保育士・幼稚園教諭・栄養士・介護福祉士なども四年制大学へと移行してきた。さらには修士課程まで含めた高度専門職養成課程を志向する傾向も認められる。短期大学への進学動機と学科イメージに関して西野・小関ら（1986）[2)]は，一定の職業に特化した資格取得教育を志向する学科の学生は自己実現志向であり短大への満足度が高く，特定の職業に特化しない基礎能力や教養教育的な学科の学生は当面の就職への不安が高く将来への目標を描けず満足度も低いと指摘した。西野らの研究から25年が経過し受験生にも短期大学より四年制大学を志望する傾向が高まったと言われている。その中で短期大学として教養教育から職業教育までを行っている高等教育機関も少なくない。そこで，本研究では，最近の動向を知るために，短期大学生への進学動機と，短期大学での学修

に基づいた学生にとっての将来展望の一つとされる職業志向性について検討することとした。

短期大学入学時，学生は自己実現や専門職志向だけでなく地理的状況や経済状況などを含めた理由で短期大学に入学すると考えられる。いっぽう，学習一般および専門的な教科などの学習に対して興味・関心や不安などを抱いていると考えられる。また動機づけは，目標を中心にした一連の情報処理の過程であり，個人が設定する目標やその意味づけによって目標に到達する手段・方法・過程が影響を受け，結果的にさまざまな行動が生じる[3)]。また短期大学では専門的な職業教育への志向性が高く単に高等教育への動機だけではなく資格などの職業的な動機も考慮されると考えられる。日本の高校生の進学動機に関する研究で共通して報告されることは，本来的な機能である専門性を備えた知識を得ることだけではなく，むしろ副次的な機能である自分自身について考えるモラトリアム機能や大学で多くの人と出会いたいということを進学動機とした結果が得られている[4)]。さらに，学生自身が自覚している適性と大学環境とのマッチングに関する実証的研究においても，四年制大学への進学動機は大学生活のそのものに影響を及ぼすことが明らかにされている[5)]。特に地域性が四年制大学より強い短期大学では，大学環境とのマッチングを思考する機会が少なく選択の余地は狭まる。したがって，学生が大学または短期大学への進学を決意した動機を明らかにすることは，大学や短期大学における学内外の活動に対する目標意識を明確にすることができるという観点から，学生生活をより充実させるために必要な要素であると考えられる。

大学や短期大学への進学の先にあるものは職業の決定であるが進学を決定する場合，短大・大学・専門学校での学科選択は将来の職業選択に影響を及ぼすので，進学によってある程度職種が限定されていく。さらに，短期大学の場合は既に自分が目標とする職業を決定し，そのために必要な資格を取得するために入学する学科も多い。そのため，入学後の大学における授業や資格取得のための実習，学内外の対人関係，アルバイトなどの職業志向的な行動を通して，自分の職業に対する意識が形成されていくと考えられる。いっぽうで，学科の設置目的が保育士や介護福祉士などのように職種が特定されそのための資格取得に向けた勉学が求められる学科では，職種の選択よりも職場の選択が優先される。

これまでに職業経験のない大学生が就職をするためには，職業人としての規範や行動様式を内在化させていく職業社会化過程が必要である。職業社会化過程の発達は３段階で発達する[6)]。第１段階は，学校（高校，短期大学，専門学校，大学など）における特徴，専門分野，過程の状況，両親の教育水準や職業，個人の特性や生活などの外的規定要因である。これらは職業社会化過程を外的かつマクロ的に規定している要因で，職業社会化過程の入り口となるものである[7)]。第２段階は，職業社会化に関わる学校での課外活動を含む諸経験を通じて，職業選択に関する自己概念の確立と職業意識を形成していくプロセスそのものである。スーパー（1963）は，自己概念を職業に置き換えることが職業決定には重要であり，自己概念と職業興味や職業への適性が一体化する過程で職業意識が形成されていくとした[8)]。第３段階は，職業社会化としての職業選択がなされる過程である。職業選択は実際の職業に対する活動を行うことであり，免許や資格取得，職業・会社の選択という具体的なものになっていく。しかし，職業社会化過程の第２段階において，知識・技能の習得，実技・実習，学内外の

活動の充実感，さまざまな対人関係への経験といった職業社会化経験が少ないと，自己概念や職業意識の形成が希薄になる。卒業や資格のために必要な単位の取得や，就職活動や進路決定を行わなければならない時期になっても積極的な行動を行うことができず一見すると無気力で怠惰な状態が続くことも多い[9]。

そこで，大学生の大学への進学動機によって，職業志向性の程度や方向性を検討することで，今後の学生生活や就職活動への援助を検討することが可能と考えた。本研究では職業社会化過程の第２段階であると考えられる短期大学生を対象とし，短期大学への進学動機と職業への志向性について調査を行う。さらに，短期大学では職業志向性が決定した後に入学を希望する職業専門教育型の学科が多いため，教養型の学科との比較を行うことで，卒業後の職業に対する希望が定まった学生と定まらない学生の職業志向性の持ち方に違いがあるかについて検討する。

２．目的

短期大学生を対象として，短期大学への進学動機からどのような将来的な目標や職業を志向しているのかについて調査を行う。さらに，卒業後に志望する職種が入学時に定まっていない経営系や総合文化系と，志望する職種を定めて入学する保育系・介護福祉系の学科を比較することで，卒業後の職業に対する希望の有無によって，進学動機や職業志向性がどのような特徴を持つかを検討する。

３．方法

３－１．調査対象

首都圏にある短期大学２校の１年生と，東北地方のＹ市にある短期大学の１年生を対象とした。学科の内訳は，経営系学科，総合文化系学科，保育系学科，介護福祉系学科である。このうち，経営系学科と総合文化系学科は，基本的には入学後の勉学や学生の適性によって卒業後の職種が決定される傾向であった。保育系学科は，主に保育士・幼稚園教諭第二種免許状の取得を目指す学科で，介護福祉系学科は主に介護福祉士の取得を目指す学科であった。経営系学科と総合文化系学科に入学した学生は，入学時にはある程度の職種への志向性はあるものの入学後に広い教養と広範囲な専門に対応した幅広い学修が可能となるカリキュラムが組まれていた。保育系学科と介護福祉系学科に入学した学生は，それぞれ入学時に将来の職種を決定し，それに向かった資格取得のための授業や実習が配置され，将来への職業教育を中心としたカリキュラムが組まれていた。このうち男子学生は23名，女子学生は159名であった。

３－２．質問紙

フェイスシートとして，大学の所属している学部・学科，年齢，性別を答えてもらった。さらに，卒業後に職業希望があるかどうかという職業希望の有無（２件法）と，それに関連して卒業後の職業希望がある場合は自由記述で答えてもらった。進学動機に関するアンケートとして，大学へ進学する動機を答えてもらうために，「大学への進学希望の意思決定過程」に関する37項目[4]を２件法で答えてもらった。職業志

向性に関するアンケートとして，どのような条件の職業に就きたいかを「職業への志向性」に関する28項目[6]に５件法で答えてもらった。

３－３．分析法

無回答などの欠損値が多いデータや回答に信頼性を欠く恐れのあるデータは，分析の対象から除外した。最初に，進学動機尺度（37項目）と，職業志向性尺度（28項目）の因子分析を行った。それぞれの尺度について最尤推定法で因子抽出を行い，Harris-Kaizer 回転法により単純構造を求めた。各変数によって有効回答者の人数が異なるため，進学動機因子と職業志向性因子の因子得点を尺度別に算出した。因子得点はサーストンの最小二乗法によって求めた。因子得点は，平均が０で標準偏差が１の母集団において標準正規分布Ｎ（0, 1）に従う標準化得点として算出した。因子得点を学科別に平均と標準偏差を求めて比較した。さらに，一般化線型モデルで，大学，性別，学科系統を独立変数として進学動機と職業志向性を従属変数とした分散分析を行った。大学差は学科差とも交絡が生じ，また大学差と性差も同様に交絡が生じた。そのため学科系統差は単純主効果で比較することは避け，Tukey 法で多重比較を行い確認した。

４．結果

無回答が３カ所あるか，同じ選択肢に回答が集中するなど回答が信頼できないデータを除外した。その結果，最終的に分析の対象となった内訳は，欠損値もあり分析対象で若干異なるが，経営系（女子26名），総合文化系（男子９名，女子37名），保育系（男子１名，女子49名），介護福祉系（男子12名，女子35名）であった。このため女子に偏った結果になったが，短期大学は全体的に女子の志願者が多いことと，学習面や職業志向性について分析に影響を与えるほどの特段の性差も認められないことから一括して分析を行った。

４－１．大学への進学動機尺度の因子分析

大学への進学を決意した理由37項目について最尤推定法で因子抽出を行い，最尤推定基準と Scree-Test の結果を参考に５因子を解析的因子回転の対象とした。プロマックス法などのように直交回転を手続きに含まない純然たる斜交解である Harris-Kaizer 回転法により単純構造を求めた。この結果，Table 1 に示す５因子解が求められた。

因子Ⅰは，(31)結婚に有利になるために，(35)大学生になって恋人を見つけたいので，(37)親や親戚が行けというので，(27)自分の子どものためにの４項目を中心として構成されていた。先行研究では裕福さや一流企業志向が認められるが，今回の結果からは認められなかった。先行研究では将来生活因子としていたが，むしろ現実に目の前に差し迫った生活環境を反映したと考え，生活志向因子とした。

因子Ⅱは，(26)悔いのない一生を送りたいので，(36)学問の探究をしたいから，(28)大学で部活動をしたいからの３項目を中心として構成されていた。漠然とした短期大学生活への憧れのような因子でもあるが，他の因子との関係も考慮して自己実現因子とした。

因子Ⅲは，(1)専門知識を深めたいから，(20)資格取得のため，(15)人の役に立ちたいから，(14)専門職に就きたいからの４項目を中心として構成されていた。他の因子との内容を考慮して専門志向因子とした。

因子Ⅳは，(22)広く教養を身につけたいので，(30)自分の視野を広げたいので，(４)自分の可能性を求めるために，(２)自分の個性を磨くためになど６項目を中心として構成されていたため成長志向因子とした。

因子Ⅴは，(10)開放感を味わいたいので，(７)大学生になって，遊びたいから，(25) 自由を求めて，(21)大学生活にあこがれていたのでなど７項目を中心として構成されていたため青春享楽因子とした。

Table 1　短大への進学動機の因子パターン

No.	項目	生活志向	自己実現	専門志向	成長志向	青春享楽
31	結婚に有利になるために	**.710**	.036	.150	-.158	-.006
35	大学生になって恋人を見つけたいので	**.536**	.027	.006	.123	.003
37	親や親戚が行けというので	**.521**	-.130	-.213	.036	-.136
27	自分の子どものために	**.425**	.193	-.072	.179	-.174
26	悔いのない一生を送りたいので	.029	**.707**	-.019	-.112	.064
36	学問の探究をしたいから	-.067	**.538**	-.009	.006	-.013
28	大学で部活動をしたいから	.243	**.416**	-.154	.004	-.143
9	本当の生き方を見つけたいので	-.102	**.362**	-.105	.251	.187
1	専門知識を深めたいから	-.022	-.129	**.789**	.074	.154
20	資格取得のため	.232	-.026	**.523**	-.075	-.074
15	人の役に立ちたいから	-.074	**.322**	**.466**	-.010	.082
14	専門職に就きたいから	.164	.277	**.428**	-.192	-.176
22	広く教養を身につけたいので	.061	-.167	.171	**.763**	-.058
30	自分の視野を広げたいので	.027	-.059	-.013	**.692**	-.042
4	自分の可能性を求めるために	-.190	.119	-.170	**.677**	-.021
2	自分の個性を磨くために	-.116	.202	-.104	**.466**	-.026
6	自分のやりたいことをやるために	-.005	.089	**.341**	**.331**	-.084
18	趣味や興味を生かせる仕事に就きたい	.103	-.022	.172	**.329**	.011
10	開放感を味わいたいので	-.098	.064	.143	-.149	**.857**
7	大学生になって，遊びたいから	.079	-.157	.090	.037	**.688**
25	自由を求めて	-.090	.172	-.162	-.056	**.682**
21	大学生活にあこがれていたので	-.038	.074	.096	.182	**.517**
13	周りの人が進学するから	.194	**-.339**	.030	.171	**.402**
17	ただ，なんとなく	.062	-.250	**-.384**	.050	**.393**
33	多くの人と知り合いになりたいので	.073	**.338**	.079	.107	**.305**
16	大学生だと体裁がいいので	.273	-.223	-.091	.010	.300
8	単なる見栄で	.174	-.098	-.069	-.005	.281
29	暇だったので	.280	-.008	-.071	-.216	.261
19	高校卒で社会人になりたくないから	.246	-.118	-.144	.184	.250
11	親元を離れたいから	.108	-.010	-.010	.143	.134
32	生きがいを見つけるために	-.010	.265	.094	.259	.120
23	一流（有名）企業に就職したいので	.291	.012	-.214	.215	-.115
12	能力の限界に挑戦したいから	.087	.290	-.019	.196	.072
3	将来，外国に行きたいから	.084	**.308**	-.262	.085	-.046
34	将来，両親に楽をさせてあげたいので	.111	**.318**	.001	.008	.046
5	裕福な生活を送りたいので	.266	.289	-.249	.021	.044
24	自分の将来のために	.128	.151	.149	.050	-.040
	因子間相関					
	生活志向	1.000	.314	-.210	.171	.523
	自己実現	.314	1.000	.333	.578	.228
	専門志向	-.210	.333	1.000	.301	-.379
	成長志向	.171	.578	.301	1.000	.197
	青春享楽	.523	.228	-.379	.197	1.000

４－2. 職業志向性尺度の因子分析

職業志向性尺度28項目について，最尤推定法で因子抽出を行い，最尤推定基準とScree-Test の結果を参考に４因子を解析的因子回転とし，Harris-Kaizer 回転法により単純構造を求めた。この結果，Table２に示す４因子解が求められた。

因子Ⅰは，(８)勤め先が安定していて，世間で評判がいいこと，(19)勤務先への通勤が便利であること，(３)高い給与やボーナスを得る機会，(13)勤務時間が短く，休日が多いことなど６項目で構成されていた。これらは先行研究とほとんど同じ項目であったため，労働条件志向因子とした。

因子Ⅱは，(11)困難な仕事に挑戦したり，責任のある仕事を任される機会，(12)人々との間に，お互いに教え，教えられる関係を発展させること，(17)仕事を通じ，自分自身が学び成長すること，(６)自己の創造性や独創力が，十分発揮できることなど10項目で構成されていた。困難な仕事に取り組んで自己成長を求める内容の項目が多いことから自己実現因子と考えた。

因子Ⅲは，(15)国際的な交流や，取引に関する仕事をする機会，(14)人間の意識や行動について，研究したり理解を深める機会，(28)何かを発明したり，発見したりするチャンスが持てることの３項目と他の因子と重複する３項目を中心として構成されていた。短大生の職業への知識なども考慮し，仕事を媒介とした良い仕事に就いているという評価を求めるような志向であると考えられることから社会的承認因子と考えた。

因子Ⅳは，(26) 専門知識を深め，それを通じて他の人々を援助すること，(23)人々が学び成長するのを，はげましたり，援助すること，(20)あることについて専門知識を深め，それを他の人々に伝達すること，(25)人間の生き方や，人生の目的について考える機会など９項目で構成されていたため関係性志向因子とした。

Table２　短大生の職業志向性の因子分析結果

No.	項目	労働条件	自己実現	社会的承認	関係性志向
8	勤め先が安定していて，世間で評判がいいこと	**.737**	.131	-.030	-.117
19	勤務先への通勤が便利であること	**.675**	-.271	.018	.105
3	高い給与やボーナスを得る機会	**.653**	-.071	.133	-.050
13	勤務時間が短く，休日が多いこと	**.595**	**-.437**	**.493**	-.213
9	親切で，思いやりのある人間関係を作り上げる機会	**.549**	**.323**	**-.304**	.113
27	職場の環境が快適で，厚生施設が充実していること	**.482**	-.053	-.101	**.335**
11	困難な仕事に挑戦したり，責任のある仕事を任される機会	-.236	**.907**	.066	-.128
12	人々との間に，お互いに教え，教えられる関係を発展させること	-.041	**.832**	.004	-.029
17	仕事を通じ，自分自身が学び成長すること	.133	**.614**	-.087	.027
6	自己の創造性や独創力が，十分発揮できること	.074	**.607**	.221	-.103
2	みんなから，したわれ尊敬されること	.297	**.546**	.041	-.122
1	仕事の内容が，複雑で変化に富んでいること	-.263	**.530**	**.482**	-.196
10	人々が自己の可能性を十分発揮できるよう，援助し，指導すること	.044	**.521**	-.142	**.317**
16	みんなから信頼され，頼りにされること	.271	**.450**	-.027	.142
5	人間の可能性や能力について，深く知る機会	.069	**.414**	.202	.053
7	困っている人や，年下の者の相談に応じたり，アドバイスをすること	.075	**.398**	.101	.179

No	項目	労働条件	自己実現	社会的承認	関係性志向
15	国際的な交流や，取引に関する仕事をする機会	.023	.183	**.576**	-.130
14	人間の意識や行動について，研究したり理解を深める機会	-.015	.064	**.521**	.175
28	何かを発明したり，発見したりするチャンスが持てること	.109	.200	**.465**	.021
26	専門知識を深め，それを通じて他の人々を援助すること	-.015	-.110	-.070	**.980**
23	人々が学び成長するのを，はげましたり，援助すること	-.033	-.057	-.042	**.931**
20	あることについて専門知識を深め，それを他の人々に伝達すること	-.129	.054	.182	**.678**
25	人間の生き方や，人生の目的について考える機会	.058	-.098	.184	**.613**
18	人々の持つ悩みや問題について，研究したり知識を深めること	-.138	.003	**.383**	**.509**
22	仕事の専門性が高く，誇りを持てること	.008	.272	-.095	**.491**
21	他の人々と，表面的ではない，心からのつながりを持つ機会	.172	.232	-.157	**.469**
24	最先端の技術や情報に接し，それらを実用化すること	.173	-.266	**.440**	**.454**
4	社会的に恵まれない人のために，役に立つこと	.103	.101	.139	**.365**
	因子間相関				
	労働条件志向	1.000	.565	.338	.525
	自己実現	.565	1.000	.443	.789
	社会的承認	.338	.443	1.000	.471
	関係性志向	.525	.789	.471	1.000

４－３．進学動機尺度の分散分析結果

大学，性別，学科系統を独立変数として，進学動機５因子の因子得点を従属変数として一般化線型モデルによる３要因分散分析を行った。経営系学科が１大学で女子のみであるため学科系統と性別で交絡が生じるため一般化線型モデルを用い学科系統による単純主効果についてのみ注目した。

この結果，進学動機尺度の生活志向因子（因子Ⅰ）では，学科系統による有意差が認められた（F（2,168）＝2.94,p. ＜.05）。Tukey 法による多重比較の結果，経営系と総合文化系，経営系と保育系で差が認められた。経営系は総合文化系や保育系に比べ生活志向因子得点が高かった。自己実現因子（因子Ⅱ）では，学科系統による有意差は認められなかった（F（2,168）＝2.33,ns）。専門志向因子（因子Ⅲ）では，学科系統による有意差が認められた（F（2,168）＝19.97,p. ＜.01）。Tukey 法による多重比較の結果，保育系と介護福祉系を除く全ての組み合わせで差が認められた。経営系の専門志向が特に低く，総合文化系が次に低く，保育系と介護福祉系の専門志向因子得点が高かった。成長志向因子（因子Ⅳ）では，学科系統による有意差は認められなかった（F（2,168）＝0.48,ns）。青春享楽因子（因子Ⅴ）では，学科系統による有意差が認められた（F（2,168）＝6.76,p. ＜.01）。Tukey 法による多重比較の結果，総合文化系と介護福祉系，保育系と介護福祉系を除く全ての組み合わせで差が認められた。経営系の青春享楽志向が特に高く，総合文化系と介護福祉系が平均程度で，保育系が低くなっていた。なお性差については全ての因子で認められなかった。大学差については，学科系統差との交絡があり学科系統差に含めて考えることとした。

Table３　性別・学科系統による大学への進学動機尺度の因子得点

	N	生活志向	自己実現	専門志向	成長志向	青春享楽
男子	22	.076(1.045)	.060(1.066)	−.140(1.019)	−.047(1.054)	.135(0.917)
女子	154	−.011(0.857)	−.009(0.876)	.020(0.879)	.007(0.892)	−.019(0.928)
経営系	27	.429(1.147)	−.247(1.004)	−.906(0.878)	−.280(1.046)	.708(0.964)
総合文化系	47	−.155(0.518)	−.174(0.951)	−.384(0.962)	.183(0.892)	.128(0.853)
保育系	51	−.224(0.733)	.079(0.759)	.494(0.543)	−.074(0.844)	−.461(0.753)
介護福祉系	51	.139(1.024)	.212(0.883)	.340(0.560)	.053(0.900)	−.033(0.879)

括弧内の数値は標準偏差を示す。

４－4.職業志向性尺度の分散分析結果

大学，性別，学科系統を独立変数として，職業志向性４因子の因子得点を従属変数として一般化線型モデルによる３要因分散分析を行った。経営系学科が１大学で女子のみであるため学科系統と性別で交絡が生じるため一般化線型モデルを用い学科系統による単純主効果についてのみ注目した。

職業志向性尺度の労働条件志向因子（因子Ⅰ）では，学科系統による有意差は認められなかった（F (2,168) ＝1.83,ns)。自己実現因子（因子Ⅱ）では，学科系統による有意差が認められた（F (2,168) ＝6.69,p.＜.01)。Tukey 法による多重比較の結果，保育系と経営系，保育系と総合文化系で差が認められた。保育系は経営系や総合文化系に比べ自己実現因子得点が高かった。社会的承認因子（因子Ⅲ）では，学科系統による有意差は認められなかった（F (2,168) ＝1.78,ns)。関係性志向因子（因子Ⅳ）では，学科系統による有意差が認められた（F (2,168) ＝10.87,p.＜.01)。Tukey 法による多重比較の結果，経営系と総合文化系，保育系と介護福祉系を除く全ての組み合わせで差が認められた。経営系と総合文化系は保育系と介護福祉系に比べ社会的承認因子得点が高かった。なお性差については関係性志向因子（因子Ⅳ）のみで有意差が認められた（F (1,168) ＝8.38,p.＜.01)。男子の関係性志向因子が高かった。大学差については，学科系統差との交絡があり学科系統差に含めて考えることとした。

Table４　性別・学科系統による大学への職業志向性尺度の因子得点

	N	労働条件志向	自己実現	社会的承認	関係性志向
男子	22	.133(0.925)	.254(0.923)	.477(1.331)	.198(1.201)
女子	147	−.020(0.926)	−.038(0.959)	−.071(0.792)	−.030(0.924)
経営系	26	−.143(1.036)	−.407(1.006)	.264(0.741)	−.454(0.808)
総合文化系	46	−.187(0.730)	−.204(0.771)	−.196(0.804)	−.387(0.780)
保育系	50	.159(0.908)	.373(0.918)	−.122(0.827)	.392(0.904)
介護福祉系	47	.093(1.026)	.028(1.011)	.176(1.067)	.212(1.045)

括弧内の数値は標準偏差を示す。

５．考察

本研究では，短期大学生の進学動機と職業志向性が学科の専門性によってどのように異なるかを検討した。ここでは，因子分析の結果が従来とどのように異なるのか，過去の研究と四年制大学生との比較した。また，学科系統による特性の違いについて因子得点の学科系統の差から検討を試みた。

５－1.短期大学生の進学動機

進学動機尺度からは５因子が抽出された。渕上（1984）の結果[4]と同様に５因子解であったが因子構造が異なっていた。また，西野・小関ら（1986）の結果[2]と比較しても経済志向性や社会的承認への志向性が身の回りの生活レベルに留まった。短期大学生の進学動機として身近な生活空間や人間関係の中で安定した将来像を求めるといった生活志向因子が抽出された。この因子は同時期に四年制大学生の進学動機と職業志向に関する調査を行った佐藤・岡村（2011）の結果[10]では将来生活因子として論じられており一面で似通った因子かとも考えられるが項目レベルでは異なった。短期大学生では裕福さや有名企業などへの就職といった項目は含まれず，結婚して落ち着いた家庭生活を送るための志向性と考えられた[11]。西野・小関らの研究では地域に根ざした地の利に関する因子として考えられてきた。今回の結果からは，自分自身の裕福さよりも周囲への期待にこたえることを優先するという主体性の無さの表れとも考えられた[12]。自己実現や成長志向は従来までの研究と大きく変わらないが，渕上（1984）の研究では個性の追求に関する因子が専門性志向として抽出された。これは，短期大学生においては自分自身が主体的に構築する履修モデルよりも，既に養成課程として組まれた資格取得や専門職業への教育によって自分を特化したいことの反映と考えた。

進学動機の学科系統間での比較の結果，各学科系統別の進学動機を次のように考えた。経営系は，生活志向と青春享楽が高く専門志向が極端に低かった。短期大学に勉学や職業への専門性は期待せず，家族や友人に限定された個人的な交際範囲での将来設計のために進学すると推定された。総合文化系は，専門志向性がやや低いが成長志向性が示唆された。不明瞭ではあるが将来への自己実現志向をもって短期大学に入学するものの，職種に特化した専門性への志向よりも広範な職業選択を試みて混乱していると推定した。保育系は，専門志向性が高いいっぽうで青春享楽の低さに特徴がある。短期大学への入学目的は保育職に就くためであり資格取得のために我慢して学ぼうとする傾向が明らかであると考えた。介護福祉系は，専門志向性が高く自己実現が示唆された。短期大学への入学目的は資格取得であるが，資格に特化した職業だけでなく広範囲な将来選択にも期待する傾向があると推定した。

これまで，短期大学の学科系統内では専門志向因子に有意差が認められることは無かったが，今回のデータからは保育系と介護福祉系が高く，経営系と総合文化系が低いという結果になった。従来の研究では，専門志向性が低い学科では，自己実現が高く相互補完的な傾向がある[13]とされてきたが，今回の調査結果からは，この傾向は認められなかった。これまでは，短期大学では自己実現よりも専門性志向が優先し，四年制大学では専門性志向より自己実現が優先される傾向があった[14]。

５－2.短期大学生の職業志向性

短期大学生の職業志向性は４因子が得られた。しかし，若林・和田ら（1986）の職務志向性尺度は労働条件志向と職務内容志向と人間関係志向の３因子である[6]。今回の調査対象となった短期大学生からは，外発的動機づけ要因である労働条件志向因子は，オリジナルと同様に抽出された。しかし職務内容志向と人間関係志向は３因子に分割され，職務内容志向から具体的な職務への動機づけを除いた自己実現，自分の職場の評価を限られた友人関係などの内輪で競い合うような社会的承認，職場で後輩の世話や人間関係の構築と仕事を通じて人のために役立ちたいという人間関係志向の因

子で再構成された。短期大学生では，職業選択を模索する機会が少ないことも考えられた。

職業志向の学科系統間での比較の結果，各学科系統別の職業志向性を次のように考えた。経営系では社会的承認が高く自己実現や関係性志向は低かった。職業志向は，待遇面を含めて人に自慢できるような職業には就きたいが，職業を通じての自己成長や能力を高めるという意志はなく，さらには職場での人間関係に関わりたくないという傾向が強いと推定した。総合文化系では，評価される職に就きたいという期待も職業を通じての自己成長や発達も志向せず，さらには職場での人間関係に関わりたくないという傾向が認められると推定した。保育系では，明らかに職業を通じた自己成長や発達と人間関係志向への期待があると推定した。介護福祉系では，評価される職場に就きたいという傾向が少しあり，職業を通じた人間関係志向を期待していると推定した。なお労働条件志向で有意差が認められなかった理由は，卒業後の職業希望の有無によって差がないことであると示唆された。また男子学生は職業選択において，女子学生に比べ社会的承認への欲求が強いことが示された。

５－3. まとめと今後の課題

短期大学の学科を特定の職業に特化した業務独占的な資格取得を目的とした学科か否かで大別できると考えた。経営系学科と総合文化系学科でも資格取得への科目が配置されているが，保育系学科や介護福祉系学科のように実質的に職業に直結し職場が確保されているわけではない。また，短期大学生は四年制大学生に比べて，職業選択場面で時間的猶予が無く，職業選択や将来展望のための模索の期間とされるモラトリアムの期間が非常に少ない。そのため，卒業後の将来像について自分の好みや個性に基づいて決定する学科系統よりも資格や職業が定まった学科系統で，学習志向性が期待できる進学動機となり職業志向性についても高かった。しかし，これは現在の短期大学卒業者を取り巻く雇用環境から学生は短期大学卒業ではキャリアアップを期待できないと気づいているためではないかと考えた。特に経営系学科で，専門志向が低く対人的な価値形成を将来の職業に求めないが，保育系学科と介護福祉系学科では専門性志向が高く対人的な価値形成を職業に求めることから明らかであった。

今後の課題として，大学や短期大学への進学動機や職業志向性は，調査対象の大学や短期大学の校風や地理的条件・地域経済的条件によって大きく左右される。一般的な結論を得るためには，調査対象とする大学や短期大学の抽出について検討していく必要がある。本研究では学科系統間での比較に留めたが，進学動機と職業志向性でそれぞれに被験者の分類を行い，それらの対応関係を明らかにして，進学動機が職業志向性へと発達する場合の特徴的な傾向を見つけることも必要であろう。特に職業教育が重視される短期大学に於ける研究では重要な研究課題であると考えた。

参考・引用文献

１）文部科学省 2001 大学の設置等の認可に係る審査関係規程の改正について 13 文科高 第七号 平成一三年三月三〇日 文部科学省高等教育局長通知

２）西野泰広・大野元三・手島茂樹・小関賢・松田浩平 1986 女子学生の短大に対す

る態度；幼児教育科３校の進学動機，学科イメージ，満足感の比較　保母養成研究年報第２・３合併号，pp.16－37.

３）宮本美沙子・奈須正裕編 1995 達成動機の理論と展開 続・達成動機の心理学 金子書房

４）渕上克義 1984 進学希望の意志決定過程に関する研究 教育心理学研究 vol.32, No.1，pp.59－63.

５）斉藤浩一 2002 大学進学動機が入学後のストレッサーおよび学校嫌いに及ぼす影響 進路指導研究，23，pp.7－14

６）若林満・和田実・中村雅彦・斉藤和志 1986 東海地区国立大学新入生の進路意識に関する研究 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），33，pp.247－278.

７）鹿内啓子・後藤宗理・若林満 1982 女子大生の社会的・職業的役割意識の形成過程に関する研究 名古屋大学教育学部紀要 29，pp.101-136.

８）Super, D.E. 1963 Self-concepts in vocational development. In D.E. Super, R. Starishevsky, N.Maltin, & J.P.Jordan (Eds.), Career development: Self-concept theory. New York: College Entrance Examination Board. pp. 17-32.

９）岡田昌毅 2007 ドナルド・スーパー（１章） 自己概念を中心としたキャリア発達 渡辺三枝子 新版キャリアの心理学－キャリア支援への発達的アプローチ－ ナカニシヤ出版

10）佐藤恵美・岡村一成 2011 大学への進学動機と将来への職業志向性に関する一研究，富士論叢 56(1) pp.57-75

11）原田　泰 2009 日本はなぜ貧しい人が多いのか「意外な事実」の経済学 新潮社

12）McManus,A. &Feinstein,A.H. 2008 internship and Occupational Socialization: What are students learning? Developments in Business Simulation and Experiential Learning, Vol.35, pp.128-137

13）松田浩平・片山吉春 1988 わが国の短期高等教育機関の在り方に関する研究 日本応用心理学会第55回大会発表論文集 pp.45－46

14）松田浩平・佐藤恵美・中山智恵 2007 大学志望動機と試験結果に対する原因帰属が学業成績に与える影響　文京学院大学人間学部紀要 vol. 9，No.1，pp.251－264